

# 古典と歴史を学ぶ

整理整頓の続きを中断し今号は唐突にひとりの人物を紹介する。昨年十月、病気で普通に歩けなくなつて無念の退社をした吾郷春男七十七歳。詩吟という趣味を極めて宗師に昇りつめ、その間古典と歴史に馴染んで人間形成をなすとげ、この時代稀れなサムライ精神を身につけた人だ。

## 学ぶ人は尊敬する人を持つ人

愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ(ビスマルク)というが、歴史も先人の経験であるから、感心するほどの名言ではない。歴史はもちろぬ自分の経験からも学ばないのが愚者である。要するに「学ぶ人」は賢者で、学ばない人は愚者だということ。

愚者は仕事ができず、人からばかにされ相手にされないから誰でも賢者の側に入りた。そのため「学ぶ人」になること。学ばない人になるにはキツカケがいる。受験勉強も学ばないが、知識吸収に偏重しており、人間性の上には役立たない。学校秀才が人間味に欠け、器が小さく、人の上立つ指導者が務まらないという話を聞くが、人間として大事なものを転載である。

## 詩吟宗師嶽風が学んできた事

詩吟との「出会い」は明治大学二年生、十九歳の時である。二泉校舎、文化祭の舞台上に登場した隻腕の紳士、類髭を蓄えた立派な体躯。頼山陽の名詩「泊天草灘」を朗々と詠われた時、全身に衝撃が走った。水天髯青一髪…の豪快な吟声は、今でも鮮やかに私の耳に残っている。六行詩、三分間の演物にしてみた。

は、あの憧れの隻腕吟士には程遠い。失望の連続、自分には素質がないと吟詠をやめてしまった。勤務が横浜から東京大手町に変わった。松戸に転居し何年か経った頃、広報で月一回の無料市民講座を知り、早速土曜日の教室に出席した。岩淵神匠先生が松戸市民のために開設されて六十六回目の教室であった。

李白の越中懷古。越王勾踐呉を破つて帰る。若々しく雄渾な吟声。詩吟とは斯くも格調高く、美しいものか。胸が熱くなる感動に酔い痴れた。ついに憧れの正統派詩吟に巡り合えたのだ。幸運な巡り合わせに感謝した。隻腕吟士から二十三年後の新鮮な出会いであった。爾来今日まで、先生から琴線に触れる漢詩や和歌、豊かな解説と品格ある人生哲学、流派を越えた自由な詩吟を学んでいる。

神匠先生は、神風流、匡風会会長として、神風流松戸教室の他、十数教室を運営され、千葉県総連合理事長として活躍。品性高潔、典雅雄渾な吟声と確乎たる技量は吟界ナンバーワンと評判が高い。九十年代、乱高下の為替変動と海外市場不振に翻弄され、私が勤める貿易会社は瀕死の状態に陥った。私は自分の統括部門を円満閉鎖の後、退職した。緊張と懊悩の激務から解放されたものの、無職浪人の生活を二年間余り送った。冬蜂の死にどころなく歩きけり

第二の人生を模索、幸い株式会社アイウィルに非常勤講師、審査員として入社することができた。私も研修生に混じって六カ月の管理者能力養成研修を受講した。経営者養成研修で空白になっていた講座の補充として「詩吟と経営」セミナーの講師を命じられた。自信はなかったが引き受けた。十五名の研修生を対象に、教材作りを行った。本来の実技指導を減らし、中国、日本の漢詩の歴史から、詩吟の概念、効用、音程と音階、洋楽との対比、発声と手法等を私なりに網羅して初講座に臨んだ。一ヵ月後十五名の吟を一人ひとりで審査し、点数評価した。その後、事務所的女史二名から詩吟教授を頼まれ、一緒に詩吟研究を始めた。有名な短歌や御母堂の好きな万葉秀歌に吟符をつけて、またご主人の三回忌に備え、追悼詩をとり上げ一緒に吟じた。吹きおこる秋風鶴をあゆましむ

経営管理講座 300 染谷和巳

## これが人間性を高める本道だ

人は人間としての成長を人に求め書に求める。人とは尊敬する人であり書とは古典である。人は自分の成長のために尊敬する人を本能的に捜し求める。出会えた人、獲得できた人は幸福である。自己の成長が約束されるからである。

社員は社長がその尊敬する人であつてほしいと願う。私はサラリーマン時代、思い出すだけで五人の社長につかえた。尊敬できる人であつてほしいとその人間を見たが、一人目は詐欺師、二人目は小心な自慢屋、三人目はヤクザの色の傀儡女社長、四人目は社員を育てられぬ職人編集長、そして五人目は猜疑心が異様に強い神経質な人で幹部をつぎつぎに責め殺された社長で、残念ながら一人もいなかった。

七十を過ぎた今、自分が若くて間違つた判断をしていたかと思ひ返してみることがやはりそれぞれ人間性に大きい欠陥があり、それが長所をカバーできないほど致命的で、反面教師にはなつたが、もう一度会いたいと思う人はひとりもない。

日本人は社会人になり会社に入つてから成長を始める。学校を出てもまだ子供で一人前になるのは会社へ入つて五年十年たつてからである。ではなぜ会社が人を成長させるのか、会社が社員教育に力を入れるためもあるが、最大の理由は社長や上司など、上に立つ人の中に社員が尊敬できる人がいるからである。社員は人生で初めて「この人を見習おう」、考え方や行動を「お手本にしよう」と思う人を得る。一人の尊敬する人を得ることが、社員を成長のレールに乗せ、加速を始めるのである。もし会社で得られなければ外で見つけなければならない。吾郷は詩吟の世界で神匠先生という尊敬する人を得た。先生の域に達するために鍛錬し、謙虚に教えを乞ひ、何かする時は相談し許可を得た。尊敬する人に服従することに喜びを感じているようである。そしてもうひとつ、吾郷は詩吟の漢詩百篇、和歌二百首を空んじている。意味を理解するうちに、古典に親しみ古典を楽々と理解できるようなり古事記、日本書紀までもとより古事記、明治、江戸期多くの古典を紐解いた。それにより歴史に明るくなった。自分が大和民族の血をひく者であること、武士道精神の末席にある者である自覚が芽生え、しだいに強くなるを征するようになった。それが誠実、無欲、一徹の人格を作りあげ、謙虚で責任感が強いが、誰に対しても自分の信するところを臆することなく述べる真摯な性格に仕立て上げ、誰からも信頼される大人になった。吾郷の退社とその一文を読んだことから、人の成長には①尊敬する人を持つこと②古典と歴史を学ぶことが大切だと思つた。言い古された単純なことであるが、日本の若者の多くが「それがどうした」とこれに目もくれないので、吾郷を例にこれが「本道」と教示した。

五段に昇進している。思えば神匠先生と染谷社長との暖かいご支援とご協力を得て現在がある。神風流の懐は奥が深い。私は未だ未熟道中である。感謝の心を忘れず更に研鑽を積み、聖賢

の詩や歴史から人生の知恵を学び続けたい。春風や 鬪志抱きて 丘に立つ 一虚子